様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ４ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７１７６

研究課題名（和文）歴史生態学から見るメラネシアの人間－サンゴ礁関係：ソロモン諸島の海上居住民の事例

研究課題名（英文）Human Relationship with Coral Reefs in Melanesia: A Study in Historical Ecology

研究代表者
里見　龍樹（Satomi, Ryuju）

早稲田大学・人間科学学術院・准教授

研究者番号：３０８０２４５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、サンゴ礁と密接に関わりながら暮らしてきたメラネシアの「海の民」と呼ばれる人々を事例とし、人間生活と自然環境の相互構成に注目する歴史生態学のアプローチをとることで、人間－サンゴ礁関係の人類学という新たな領域を切り拓くものである。同地域のサンゴ礁は近年、生物多様性がきわめて高い海域として注目されているが、他方で、地球温暖化や商業的漁業による生態系破壊が懸念されており、これに対し政府や国際NGOによる環境保全プロジェクトが各地で試みられている。本研究はこのように、ローカル／ナショナル／グローバルな諸動向が「社会・文化」と「自然」の両面で交差し合うメラネシアのサンゴ礁を人類学的に考察する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人間－環境関係に関するこれまでの人類学的研究の多くは、熱帯林など陸上環境と人々の関わりに注目してきた。これに対し本研究は、多くの場合ブラックボックスにとどめられてきた海洋環境に着目することで、サンゴ礁と人々の関係という新しい研究領域を切り拓くものである。また、メラネシアにおける環境保全プロジェクトの実施過程では、サンゴ礁に関わる現地住民の認識や実践への理解が不十分であるために、しばしば軋轢が生じている。本研究は社会的には、メラネシアにおける人々とサンゴ礁との関わりを人類学的に解明することで、現地住民と政府やNGOを媒介する間文化的な「通訳」の役割を果たしうるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examines the human relationship with coral reefs in Melanesia through a historical-ecological approach. Historical ecology is a relatively new field of study which focuses on the mutual constitution and transformation between human life and natural environment in history. The case examined in this study is a group of indigenous people who are called “the sea people” in north Malaita, Solomon Islands and their relations with the environment of coral reefs. The coral reefs in Melanesia, including those in Solomon Islands, are currently a hot spot in international conservation efforts. They are said to have the highest biodiversity in the world’s oceans, and at the same time are facing an ecological crisis because of anthropogenic causes. It is such an intersection of local and global attentions that is the focus of this historical-ecological study.

研究分野：文化人類学

キーワード：メラネシア　サンゴ礁　歴史生態学　ソロモン諸島マライタ島　自然

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) ソロモン諸島マライタ島のアシ（海の民）とその海上居住

メラネシア、ソロモン諸島のマライタ島北東部には、海岸線に沿って、南北約 30 キロにも及ぶ広大なサンゴ礁が広がっている。このサンゴ礁の海上には、現地でアシ（海の民）と呼ばれる人々が岩石状のサンゴの砕片を積み上げて築いた人工の島が、90 以上も点在している（写真参照）。研究代表者は、本研究の開始までに合計 17 か月間に渡ってマライタ島で現地調査を行い、人工島群の形成史、キリスト教受容過程での居住パターンの変化、漁業や焼畑農耕といった経済活動など、アシにおける海上居住の歴史と現状に多角的にアプローチする研究に取り組んできた。

(2) サンゴ礁という環境への注目と歴史生態学のアプローチ

これまでの研究の過程で、研究代表者は、アシにおける海上居住の現状を理解する上で、この人々とサンゴ礁という環境の関わりについて、より立ち入った検討が必要であるとの認識を強めた。そもそもアシの海上居住は、サンゴ礁という独特の生態系によって可能とされている。他方でマライタ島のサンゴ礁は、アシに独自の慣習的資源管理によって保護されると同時に、海岸部での農耕など人々の日常的活動から直接に影響を受けてきた。このように、アシの社会・文化的実践とサンゴ礁という環境の間には、後者によって前者が可能にされると同時に、前者によって後者が不断に変容させられるという双方向的な関係がある。

このような関係を人類学的に理解する上で有効なのが、歴史生態学（historical ecology）と呼ばれるアプローチである。歴史生態学は、主に 1990 年代以降、所与の環境に対する人間生活の一方的な「適応」を強調しがちであった伝統的な生態人類学への批判として提唱された（W. Balée, 2006, The Research Program of Historical Ecology, *Annu. Rev. Anthropol.* 35: 75-98）。そこでは、人間活動が自然環境に影響されつつそれを能動的に作り変えていくという双方向的な関係が強調され、アマゾンを「人の手が加わった自然」と再規定するなど、人間の社会・文化的実践と自然環境の相互構成の歴史を明らかにすることが目指されてきた。本研究は、このような歴史生態学の視点に立つことで、メラネシアにおける人間生活とサンゴ礁の関わりを、両者の歴史的な相互構成とその現代的変化という観点から明らかにするべく構想された。

２．研究の目的

本研究の開始に際し、以下の 4 点を課題として設定した。

課題１：アシにおけるサンゴ礁の民俗生態学（ethnoecology）

アシの人々は、自分たちが暮らすサンゴ礁の生態系やその人間活動との関わりについて、どのような認識をもっているか？　研究代表者のこれまでの調査は、アシが、サンゴの種別や成長・死滅の過程を認識するとともに、魚の行動とサンゴの関わりについても一定の知識をもつことを示している。本研究では、現代西洋のサンゴ礁生態学との異同をも検討しつつ、アシの日常的活動の中でそれらの知識が活用・検証される様態を、より詳細に明らかにする。

課題２：マライタ島における植民地主義の歴史の中の人間－サンゴ礁関係

アシに独自の海上居住は、サンゴ礁とのいかなる歴史的・生態学的な関係の下で形成されてきたのか？　研究代表者のこれまでの研究は、アシの人工島が、19 世紀末から 20 世紀初頭の

初期植民地時代に急増したという、興味深い事実を明らかにしている。この背景として推測されるのが、鉄器の導入などによる人々と自然環境の関わりの大きな変化である。このような歴史的過程は、アシとサンゴ礁の関わりをどう変容させたか？　本研究ではこのような問いを、オセアニアの他地域におけるサンゴ礁考古学の知見なども援用しつつ検討する。

課題３：アシの漁撈活動および慣習的海洋資源管理の歴史と現代的変容

アシにおいてサンゴ礁との主要な関わりをなしてきた漁撈活動や慣習的海洋資源管理は、これまでどのように変化してきたか？　既存の研究によれば、アシの漁撈や資源管理は、潮汐や季節によって複雑に変化するサンゴ礁の状態と不可分な仕方で行われてきた。他方で、国内市場向けの魚の出荷や国際 NGO の活動が活発化している現在、アシの資源利用のパターンは大きく変化しつつある。本研究では史料・文献調査、聞き取りと GPS 端末や衛星画像の活用を組み合わせ、アシにおける海洋資源の利用・管理の歴史と現状について検討する。

課題４：環境変動や自然災害との関わりにおける、アシの海上居住の歴史と将来

海洋環境との密接な関わりの中で暮らしてきたアシはこれまで、サイクロンなどの自然災害から多大な影響を受けてきた。さらに近年この人々は、国際メディアの影響の下、地震・津波などの自然災害や海面上昇などグローバルな環境変動に対して鋭敏な不安を抱いている。環境変動や自然災害の可能性はこれまで、アシによって具体的にどのように体験・認識されてきたか？　本研究では、サンゴ礁環境を取り巻くローカル／グローバルな変化に関するアシの意識と体験を検討することで、この人々における海上居住の歴史と今後について考える。

３．研究の方法

研究期間の全体を通して、日本国内における理論・文献調査、およびソロモン諸島における現地調査を主要な方法として実施した。2017 年度は、主としてそれまでの調査で収集したデータ、および理論的文献に基づいて研究を進め、これらを補足するため、2018 年 3 月にはソロモン諸島で 2 週間の現地調査を行った。2017 年度の調査・研究からは、現代の海面上昇や海洋資源の減少といった環境変動の下、アシの人々が、自らのサンゴ礁居住を危機に瀕したものとして認識していること、しかしその反面で、この人々が、サンゴ礁生態系の持続可能性に対して明確な信頼を抱いていることが明らかになった。2018 年度には、2017 年度に行った現地調査を補足すべく、2018 年 8 月にソロモン諸島マライタ島で 4 週間の現地調査を行った。この調査では、とくにアシにおけるサンゴ礁の民俗生態学に関して、それまで把握していなかった数多くの事実を把握することができ、その後の学会発表などの成果につながった。

４．研究成果

2017 年度には、それまでの調査データの検討に基づく知見を、論文「『沈む島』と『育つ岩』――あるいは、『生き存えること』の人類学」としてまとめ、2018 年 1 月、雑誌『現代思想』に発表した。同論文は、海面上昇をはじめとする現代の環境変動の下で、マライタ島のアシの人々が自らの生存あるいは文化的生活様式の持続可能性についてどのように認識しているかについて、民族誌的かつ理論的に考察したものである。また、2018 年 2 月には Association for Social Anthropology in Oceania Annual Meeting に参加し、同様の研究成果の概要について報告した。2018 年度には、2018 年 3 月および 8 月の現地調査の知見を踏まえ、アシにおける気候変動の認識などを主題として、日本サンゴ礁学会および European Society for Oceanists で口頭発表を行った。これらと並行して、マライタ島のアシに関する民族誌的研究の成果を論

文「変化の中の集団区分――ソロモン諸島マライタ島北部の『海の民／山の民』（アシ／トロ）関係をめぐって」として『日本オセアニア学会ニューズレター』に発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①里見龍樹、「沈む島」と「育つ岩」――あるいは、「生き存えること」の人類学、『現代思想』、46 巻 1 号、査読なし、2018、213-227

②里見龍樹、変化の中の集団区分――ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民／山の民」（アシ／トロ）関係をめぐって」『日本オセアニア学会ニューズレター』120 号、査読なし、2018、1-14

〔学会発表〕（計 2 件）

①里見龍樹、ソロモン諸島マライタ島における人間－サンゴ礁複合系に関する文化人類学的報告、第 21 回日本サンゴ礁学会、2018

②Ryuju Satomi, Growing Rocks and Sinking Islands: The Experiences of Climate Change among the Lau in North Malaita, Solomon Islands, European Society for Oceanists 2018 Conference

〔図書〕（計 1 件）

①浜田明範（編）『再分配のエスノグラフィ――経済・統治・社会的なもの』国立民族学博物館、2019（分担執筆）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。